

新キャンパス開設時における大学生の適応と精神的健康

春日由美¹, 吉中淳^{2*}

(¹臨床心理学研究室; ²教育心理学研究室)

(2010年1月27日受理)

Adaptation and mental health of college students in a newly established campus

Yumi Kasuga¹ and Atsushi Yoshinaka^{2*}

¹Laboratory of Clinical Psychology, Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan;

²Laboratory of Educational Psychology, Minamikyushu University, Takanahe, Miyazaki 884-0003, Japan

(Accepted : January 27, 2010)

南九州大学研究報告 第40B号 別刷

平成22年4月

Reprinted from

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY

40B

April, 2010

新キャンパス開設時における大学生の適応と精神的健康

春日由美¹, 吉中淳^{2*}

(¹臨床心理学研究室; ²教育心理学研究室)

(2010年1月27日受理)

Adaptation and mental health of college students in a newly established campus

Yumi Kasuga¹ and Atsushi Yoshinaka^{2*}

¹Laboratory of Clinical Psychology, Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan;

²Laboratory of Educational Psychology, Minamikyushu University, Takanahe, Miyazaki 884-0003, Japan

(Accepted : January 27, 2010)

Summary

The purpose of this study is to investigate mental health and adaptation of freshmen in a newly established campus and to examine whether they were affected by environmental factors of the campus. A questionnaire was administered to 95 college students in a newly established campus and 56 college students in an existing campus. The results were as follows: (1) The degree of mental health was a little worse in the new campus than the existing campus. (2) The degree of adaption was worse in the new campus than the existing campus in aspects of satisfaction with their college and of support from their friends. (3) The influence of adaptation on mental health was significant on the factor of feeling of fitness in each campus, and on the factor of satisfaction with their college in the existing campus. Though there are enough spaces, the friendships of the students seem to be insufficient in the new campus. In order to improve the environment of the new campus, further consideration is needed on the concept of "Ibashi" (the special place) in detail.

Key words: college student, adaptation, mental health, newly established campus.

1. 問題と目的

近年、文部科学省高等教育局の「大学における学生生活の充実方策について」(2000)において、「学生相談はすべての学生を対象として、学生のさまざまな悩みに応えることにより、その人間的な成長を図るものであり、今後は、学生相談の機能を大学教育の一環として位置付ける必要がある」と指摘されるように、学生相談は、問題を抱えた学生への支援のみならず、全学生を対象としてそ

の発達を支援していくことが求められている。

大学生の時期は、統合失調症の好発期と重なっていることや、スチューデントアパシーや留年に加え、近年これまで中学生や高校生で見られたような不登校が見られるなど、問題を抱えやすい時期であるといえる。したがって、全学生の精神的健康の概要を知ることは学生相談に携わる者にとっての大きな関心事である。

大学生の精神的健康については、これまで多くの調査研究がなされてきた(渡辺, 1992; 木下ら, 1997など)が、大学生の精神的健康を、単なる学生の性格傾向の問題として捉えるだけでは不十分で、大学環境への適応という観点から把握するべ

*連絡著者

きだという立場が次第に有力になっている。例えば青年の学校適応について研究した大久保(2005a)は、「適応するのに容易な特徴という実体はなく、環境との関係によって個人の特徴の価値が決まり、個人の特徴と環境との関係によって適応が決まるのではないかと指摘している。

特に新入生にとっては、環境との関係は適応上重要である。なぜならば、新入生の周囲の環境は、彼らがこれまで適応してきたものとは一変し、新入生は、親もとから離れての初めて一人暮らし、新しい友人作り、高校とは異なる大学の仕組み、サークル活動やアルバイトと授業の両立など、入学と同時に次から次へと多くの課題に直面するからである。山田(2006)は、「この時期が(大学への)適応の正念場」と述べ、この時期の適応はその後の適応にもつながるとして、その重要性を強調した。山田(2006)による新入生を対象に6月に行った調査では、授業を欠席したために参加していなかった学生の半数が、その後退学・休学・留年に陥ったという結果が報告されている。したがって、この時期に環境に対して不適応を起こしている学生をサポートすることは、その後の退学・休学などの大学不適応の予防のために極めて重要であるといえよう。

ところで、適応のための具体的な支援策や不適応への予防策を検討する際には、環境という概念を、もう少し具体的なレベルに落として分析する必要があろう。

一方では、環境を、対人関係という観点から検討する立場がある。大久保(2005b)は、中学生・高校生・大学生の学校適応について調査し、どの学校でも友人関係が学校への適応感に強く影響することを報告している。また、浅岡(2002)は、新入生の精神的健康と学生生活との関連を検討し、遊びや友達関係への積極的関与が新入生の精神的健康の維持に貢献する可能性を指摘している。

このように、友人関係が精神的健康や適応感にとって重要であるという考えは支持されているといっていようだが、学生への公的支援という立場からは、友人との関係よりも、教職員との関係が、学生への精神的健康や環境への適応に対してどのような貢献ができるかの方がより重要であるといえるだろう。先述の文部科学省高等教育局の「大学における学生生活の充実方策について」(2000)では、学生と接する機会も多い事務職員が

果たす役割の重要性が指摘されているが、今後とも、この点に関する実証研究が行われることが求められているといえるだろう。

もう一方で、環境を「居場所」というキーワードから捉える立場が近年注目されている。都筑(1998)は「『居場所』とは、物理的な場所(スペース)とそこにいる個人の安心した心理状態の両方を含んだものであり、なおかつ、そこでは他者とのつながりが存在している。そうした『居場所』は、青年の自己形成の『場』となる」と指摘している。こうした考えを検証した研究の例としては、鹿島ら(2006)による、大学適応度の低い学生は学外により居場所を求め、大学への適応がよい者は学内に複数の居場所を持っているという報告などがある。

以上のように、環境が大学生の精神的健康や適応に与える影響を、対人関係や居場所という観点、あるいはまったく別の観点から分析する研究は今後も増えていくと考えられるが、環境の影響をより実証的に検討するためには、逆説的ではあるが環境が十分に機能していない状況での調査もまた重要である。そして、キャンパスの移転や、新キャンパスの開設時という特異な状況は、環境がうまく働かなくなる可能性のある状況といえる。

キャンパス移転に関して、これまで移転を経験したいくつかの大学から報告や指摘がなされてきた。古くは、筑波研究学園都市の精神衛生について調査した稲村ら(1979)が、学園都市において学生など新しく住民になった人は、抑うつ的なし神経症的な訴えが多いと報告しており、また、中丸(2004)は、広島大学のキャンパス移転時に精神疾患をもつ学生の病状悪化や、自殺の若干の増加が見られたことを報告している。このような事象の原因として、田中ら(2004)は、キャンパス移転において特に初期は、施設の整備、物的・人的資源の充実が十分でないことを示唆している。先に述べた「居場所」というキーワードとの関連で言えば、中丸(2004)は、広島大学移転に伴う調査から、大学生にとって授業以外の時間を過ごす適切な場所の重要性を指摘している。同様のことは、田中ら(2006)の九州大学キャンパス移転後3カ月～1年3カ月の調査での、「授業以外の時間を過ごす場所がない」という項目が生活についての不満の第1位であったという結果からもうかがえた。よって学生が利用しやすい居場所はどの

ようなものかを検討し、確保することは重要であると考えられる。

以上のような、過去の例から鑑みると、2009年度から新キャンパスが開設している南九州大学・都城キャンパスにおいても、大学の環境自体が流動的である状況では、学生が精神的に不適応状態に陥りやすくなっても不思議ではないといえる。

南九州大学は1967年に宮崎県高鍋町に農学系（園芸学部）の単科大学として開学し、2003年には宮崎県宮崎市に農学系・家政系（健康栄養学部）を持つキャンパスが設置された。園芸学部を擁する大学は全国的にも少なく、学生は全国の高校から入学しており、ほとんどが人生初めての一人暮らしを経験することになっている。

そして2009年4月より、人口約2万2000人の高鍋町にあるキャンパスから南九州第3の都市である都城市の新キャンパスへの「移転」が始まった。ただし、学生の移動はなく、上級生は従来通り高鍋キャンパスで学び、都城キャンパスには2009年度は1学部1学年のみが在籍している。教職員も新キャンパスに常駐する者は少なく（2009年度前期の時点で事務職員3名、教員3名、保健師1名）、両キャンパス間を移動する教員が多い。大学の施設の一部は、まだ完成していない。先に述べたように、新入生は大学適応という課題を抱える時期でもあるが、このような変則的な新キャンパス開設時という状況のもとで、大学への適応が例年より困難になっている可能性がある。

そこで本研究では、南九州大学の新キャンパス開設に際し、新入生を対象に、精神的健康、大学への適応度、大学での生活環境（対人関係や居場所）に関する調査を行い、過去の移転に関する研究の結果と同様に大学生の精神的健康度に何か悪影響が生じていないかどうか検討し、もしも悪影響が生じているとしたならば、具体的にはどのような生活環境が特に影響を与えているのかを特定し、学生のための生活環境改善に役立つための資料を得ることを目的とする。なお、今回は宮崎キャンパスの新入生にも同じ調査を行った。大学の学生支援の方針などは両キャンパスでほぼ共通であり、新キャンパス特有の問題を浮き彫りにするための比較対象となりうると考えたからである。もっとも、宮崎キャンパスの学生の多くは、宮崎県内出身の自宅生が占め、さらに多くは管理栄養士課程に在籍

しており、カリキュラム等も非常に特色があるので、結果を解釈する際には、その点について十分に考慮する必要がある。（他大学ではあるが、管理栄養士課程の学生の特色については、山田（2006）も参照されたい）

2. 方法

1) 調査対象者と調査方法・時期

都城キャンパス、宮崎キャンパスの2キャンパスにおいて、学部1年生に対し、必修科目の授業において無記名による質問紙調査への協力を求めた（2009年6月実施）。欠損値のない151名分を分析に用いた。都城キャンパス・環境園芸学部は男子81名（85.3%）、女子14名（14.7%）の計95名であった。宮崎キャンパス・健康栄養学部（管理栄養学科42名、食品健康学科13名、1名不明）は男子10名（17.9%）、女子46名（82.1%）の計56名である。平均年齢は18.3歳であった。

2) 質問紙の構成

(1) 学生の出身地

学生の基本属性の資料として、出身地（県内かそれ以外）について尋ねた。

(2) 精神的健康度

UPI (University Personality Inventory) を精神的健康度の測度として用いた。UPIは心身の症状を尋ねる項目からなり、多くの大学で精神衛生のスクリーニングの目的で用いられている。今回は被調査者の負担を考え、脇田ら（2007）による短縮版20項目を用いた。内容は表2を参照。なお、以下ではこの短縮版を指して単にUPIと呼称することとする。各項目の症状の有無について「はい」「いいえ」の2択で回答を求め、「はい」は1点、「いいえ」は0点として合計した得点を精神的健康度とする（範囲0～20点）。得点が高いほど精神的健康状態は良くないことを示す。

(3) 大学適応度

Cronbachの尺度（Rooijen, 1986に所収）の仁平義明による邦訳版を用いた。18項目からなる。田中ら（2004）・鹿島ら（2006）の九州大学キャンパス移転に伴う調査でも用いられている。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法（1～5点）で回答を求めた。得点が高くなるほど、大学に適応していることを示す。

(4) 対人関係・居場所

対人関係については「授業と授業の空き時間は誰といっしょにいますか」(「一人である」「友人」「先生」「その他」の中からあてはまるもの1つを選択)、「大学生活(授業・奨学金など手続き・レポートなど)について、わからない時は誰にたずねますか」(「友人」「大学の先生」「事務の人」「その他」「誰にもたずねない」の中からあてはまるもの全てを選択)という2項目を分析対象とした。

また、居場所については、「授業と授業の間の空き時間はどこにいますか」(「研究室」「図書館」「学内のベンチ」「休憩室」「使っていない教室」「食堂や生協」「自宅」「近くの店」「その他」の中からあてはまるもの3つ以内で選択)という項目で尋ねた。

3. 結果

1) 学生の出身地

学生の基本属性を表1に記す。都城キャンパスでは県外出身が76.8%と4分の3以上を占め、県内出身は23.2%であった。逆に、宮崎キャンパスでは県外出身の方が19.6%と少数派で、県内出身は80.4%と大半を占めた。

2) 精神健康度の概要

キャンパスごとのUPIの各項目の平均値を表2に示す。

UPIの α 係数を算出したところ.88であり、内的一貫性が確認された。UPIの合計得点の平均値は、都城キャンパスでは6.85、宮崎キャンパスでは5.88で、都城の方が1点近く高かった。なお、先行研究においては他大学では、5.22(中川ら、2006)

表1. 学生の基本属性

キャンパス	出身地	性別	N
都城 (N=95)	県内	男子	19
		女子	3
	県外	男子	62
		女子	11
宮崎 (N=56)	県内	男子	5
		女子	40
	県外	男子	5
		女子	6

表2. UPI各項目の平均値

	都城 (N=95)	宮崎 (N=56)
1. 不平不満が多い	.43	.25
2. 自分が自分でない気がする	.29	.27
3. 悲観的になる	.43	.45
4. 気が小さすぎる	.41	.46
5. イライラしやすい	.44	.46
6. おこりっぽくなる	.29	.34
7. 死にたくなる	.13	.14
8. 何事も生き生きと感じられない	.18	.20
9. どもったり、声ふるえる	.19	.05
10. 何事もためらいがちである	.52	.34
11. 他人に悪くとらえられやすい	.31	.23
12. 他人が信じられない	.22	.20
13. 気をまわしすぎる	.41	.39
14. つきあいが嫌いである	.20	.18
15. ひげ目を感じる	.33	.20
16. とりこし苦労をする	.47	.27
17. 繰り返し確かめないと苦しい	.43	.34
18. つまらぬ考えがとれない	.42	.30
19. 周囲の人が気になって困る	.38	.39
20. 気持ちが悪くつけられやすい	.37	.41
合計得点の平均値	6.85	5.88
合計得点の標準偏差	5.11	5.13

や2.47(中井ら、2007)といった数字が報告されており^{註1)}、これらの数値と比較すると、宮崎キャンパスの得点は中川らの報告を基準にすればそれほど高いとは言えないが、中井らの報告を基準にすればかなり高い数値であり、都城キャンパスの得点はどちらの報告を基準にしてもかなり高い数値(すなわち、精神健康度がやや悪い)といえよう。

精神的健康にキャンパスの違い、性別、出身地の違いにより差が見られるかを検討するため、UPIの得点を従属変数に、キャンパスの違い、性別、出身地を独立変数として分散分析を行った(表3、表4)。その結果、キャンパスと性別の交互作用のみが有意であった。最も得点が高いのは都城キャンパスの男子(7.11)であり、次が高いのが宮崎キャンパスの女子(6.20)だった。最も得点が高いのは宮崎キャンパスの男子(4.40)で、残る都城の女子の平均得点は5.36だった。

注1) 中川ら(2006)や中井ら(2007)から、UPI短縮版の20項目にあたる項目の得点のデータを拾い出し、それをもとに春日が合計点を算出した。

表3. 学生の基本属性性別UPIの平均値・標準偏差

キャンパス	出身地	性別	平均値	標準偏差
都城 (N=95)	県内	男子	7.63	5.12
		女子	1.00	1.73
	県外	男子	6.95	5.00
		女子	6.55	5.79
宮崎 (N=56)	県内	男子	3.40	5.41
		女子	5.95	5.12
	県外	男子	5.40	5.81
		女子	7.83	4.92

3) 大学適応度の概要

大学適応度の因子分析の結果と、キャンパスごとの平均得点、キャンパス間の差の検定を行ったのが表5である。なお、逆転項目は反転させて得点を算出している。

大学適応度尺度はいくつかの下位カテゴリーに分解されることが考えられたため、18項目について因子分析を行った(主因子法, Varimax 回転, 因子数は固有値1以上の基準を設けた)。ただし、各項目のうち共通性が.20に満たなかった2項目(項目7)を除き、3因子とした。第1因子は「自分は自分の学部にとっても満足している」「私は大学生活にとっても満足している」など7項目からなり、「大学満足感」に関する因子とした。第2因子は「私は学生生活に適応するのが、難しいと感じている(逆転項目)」「私は大学での生活になじみにくい(逆転項目)」など6項目からなり、「大学生活適合感」に関する因子とした。第3因子は「悲し

い時でもだれか友達が、私が明るくなれるようにしてくれる」「この大学にはたくさんの友人がいる」の2項目からなり、「友人からのサポート」に関する因子とした。なお、項目2, 18は2つ以上の因子に.30以上の負荷量を同程度持ち、特定の因子における負荷が高いとは判断できないため、因子の解釈には用いなかった。

キャンパスごとの概要を見ていくと、都城キャンパスにおいては、18項目中16項目が3点台(どちらとも言えない~ややあてはまる)で、適応度は概ね、「どちらとも言えない」という水準にとどまるといえる。残りは4点台(ややあてはまる~非常にあてはまる)が1項目、2点台(あまりあてはまらない~どちらとも言えない)の項目が2項目であった。一方、宮崎キャンパスにおいては、4点台の項目が5項目に増え、2点台の項目は都城と同じ項目の2項目、残りの11項目が3点台であった。

項目ごとの平均値の値そのものを比較すると、18項目中、15項目で宮崎キャンパスの方が都城キャンパスよりも高い値であり、このうち有意差がみられたのは、大学満足感因子に分類された4項目と、友人からのサポート因子に分類された項目すべてにあたる2項目で、この2項目は宮崎キャンパスでは平均点が4点台の項目であった。逆に、都城キャンパスの方が、宮崎キャンパスより高い値であったのは、3項目にとどまり、このうち有意差がみられたのは、「私は大学生活でくつろげない」(逆転項目)の1項目のみであった。例外はあるが総じて宮崎キャンパスの方が、都城キャンパスよりも大学適応度は高いという結果であるといえる。

表4. 精神健康度とキャンパス・性別・出身地の関連

ソース	タイプIII平方和	自由度	平均平方	F	p
修正モデル	204.599	7	29.228	1.12	.35
切片	1843.106	1	1843.106	70.639	.00***
キャンパス	.19	1	.19	.01	.93
性別	3.89	1	3.89	.15	.70
出身地	70.57	1	70.57	2.71	.10
キャンパス×性別	133.23	1	133.23	5.11	.03*
性別×出身地	34.40	1	34.40	1.32	.25
キャンパス×出身地	.89	1	.89	.03	.85
キャンパス×性別×出身地	37.08	1	37.08	1.42	.24
誤差	3731.14	143	26.09		
総和	10296.00	151			
修正総和	3935.74	150			

表5. 大学適応度の因子分析とキャンパスごとの平均値の比較

	大学 満足感	大学生 生活適合 感	友人か らのサ ポート	共通性	都城 (N=95)	宮崎 (N=56)	t (df)
1. 自分は自分の学部にとっても満足している	.762	.036	.088	.589	3.83 (.92)	4.18 (.77)	-2.38 (149)*
9. 私は大学生生活にとっても満足している**	.709	.021	.306	.597	3.46 (1.06)	3.80 (.82)	-2.21 (138.4)*
3. なんて自分はこの大学にいるのだろうと思うことがある*	.675	.353	-.156	.605	3.38 (1.31)	3.59 (1.37)	-.94 (149)
17. 私はここで勉強することに喜びを感じている	.653	.025	.170	.456	3.23 (1.03)	3.61 (.87)	-2.30 (149)*
4. よその大学に転学したいと思っている*	.570	.283	-.161	.431	4.15 (1.11)	4.30 (1.01)	-.86 (149)
14. 私は自分の今の生活に満足している	.539	.214	.186	.371	3.20 (1.18)	3.36 (1.07)	-.82 (149)
8. 私は時々、この大学にとっても失望することがある*	.463	.161	.033	.242	3.23 (1.19)	3.70 (1.11)	-2.38 (149)*
16. 私は学生生活に適應するのが、難しいと感じている*	.015	.709	.316	.603	3.45 (1.04)	3.73 (1.10)	-1.56 (149)
12. 私は大学での生活になじみにくい*	.162	.663	.345	.585	3.65 (.98)	3.88 (1.03)	-1.33 (149)
10. 時々とても孤独だと思うことがある*	.111	.620	.154	.420	3.33 (1.11)	3.50 (1.10)	-.94 (149)
6. 私は大学ではくつろげない*	.286	.549	.117	.397	3.66 (1.04)	3.30 (1.04)	2.05 (149)*
11. 時々どのようにして、時間を過ごしたらよいかわからなくなる時がある*	.155	.481	-.076	.261	2.86 (1.32)	2.84 (1.17)	.11 (149)
13. ここでさびしいのは、いつでも自由に話せる人がいないことである*	.128	.437	.340	.323	3.89 (1.08)	4.07 (1.20)	-.93 (149)
15. 悲しい時でもだれか友達が、私が明るくなるようにしてくれる	.144	.095	.715	.541	3.45 (1.03)	4.13 (1.01)	-3.91 (149)***
5. この大学にはたくさん友人がいる	.017	.225	.635	.454	3.58 (1.12)	4.07 (.97)	-2.85 (149)*
2. 大学をやめてしまいたいと思うことがある*	.498	.441	-.143	.464	3.91 (1.38)	3.73 (1.30)	.76 (149)
18. 私は大学にいて、とても気楽でいられる	.388	.349	.327	.379	3.34 (1.04)	3.39 (1.11)	-.31 (149)
累積固有値 (%)	32.02	45.31	54.52				
7. 私はこの大学で退屈を感じたことがない					2.91 (.87)	2.95 (1.09)	-.24 (149)

*のついた項目は逆転項目。逆転項目については、反転させて得点を算出している。

**のついた項目は等分散を仮定できないためWelchの法で検定を行った。

*p<.05 ***p<.001

4) 精神健康度と大学適応度の関連

大学への適応と精神的健康との関連を検討するためUPIの平均得点を従属変数とし、大学適応度

尺度3因子の因子得点を独立変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った(表6)。その結果、都城キャンパスではUPIに対する大学生活

適合感因子の有意な影響が見られた。一方、宮崎キャンパスでは大学生活適合感因子に加えて、大学満足感因子の影響も見られた。

5) 対人関係・居場所についての検討

(1) 空き時間に一緒にいる人

空き時間に一緒にいる人の選択の結果を示したのが表7である。両キャンパスにおいて最も多かったのは友人だった(都城で80.0%, 宮崎で85.7%)。また有意な偏りは見られなかったが、「一人でのいる」の選択が、都城で17.9% (17名) であるのに対し、宮崎で7.1% (4名) であった。

(2) 大学生活について、わからない時にたずねる人

大学生活について、わからない時にたずねる人の選択の結果を示したのが表8である。両キャンパスにおいて最も多かったのは友人だった(都城で85.3%, 宮崎で87.5%)。ついで多いのが都城キャンパスでは事務の人、宮崎キャンパスでは教員となっている。この事務の人の選択率は、宮崎キャンパスでは25.0%なのに対し、都城キャンパスでは58.9%と倍以上で有意差がみられた($\chi^2(1) = 16.33, p < .001$)。

なお、「その他」にも選択率に偏りがみられるが、内訳を記すと都城は「先輩」1名、「家族」2名、「地元の友人」1名、無記入1名であった。宮崎は「先輩」6名、「恋人(彼氏)」2名、「親」1名、「同級生(個人名を記入)」1名であった。都城には常駐していない上級生の存在が両キャンパス間の違いに影響を与えているものと考えられる。

(3) 空き時間どこにいるか

空き時間にどこにいるかに関する選択の結果を表9に記す。キャンパス間で様相がかなり異なる。

都城キャンパスで選択が多いものは、順に「食堂や生協」(56.8%), 「自宅」(36.8%), 「図書館」(32.6%) であった。宮崎キャンパスで選択が多いものは「学内のベンチ」(67.9%), 「使っていない教室」(57.1%), 「食堂や生協」(30.4%) であった。

都城キャンパスでの選択率が宮崎キャンパスよりも多かったものは「休憩室」(都城24.2%, 宮崎8.9%), 「食堂や生協」(都城56.8%, 宮崎30.4%), 「自宅」(都城36.8%, 宮崎17.9%) であった。一方、宮崎キャンパスでの選択率が都城キャンパスよりも多いものは、「学内のベンチ」(宮崎67.9%, 都城14.7%), 「使っていない教室」(宮崎57.1%, 都城20.0%) であった。

表6. 大学適応度の3因子を説明変数にしたUPIの重回帰分析

	標準偏回帰係数			R ²
	大学満足感	大学生活適合感	友人からのサポート	
宮崎(N=56)	-.29 *	-.38 **	-	.36 ***
都城(N=95)		-.41 ***	-	.17 ***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表7. 空き時間に一緒にいる人

	都城(N=95)	宮崎(N=56)
	選択人数	選択人数
友人	76(80.0)	48(85.7)
一人でのいる	17(17.9)	4(7.1)
先生	2(2.1)	1(1.8)
その他	0(0.0)	3(5.4)

あてはまるもの1つを選択させた。()内は%

表8. 大学生活についてわからない時に尋ねる人(複数回答可)

	都城(N=95)	宮崎(N=56)	$\chi^2(1)$
	選択人数	選択人数	
友人	81(85.3)	49(87.5)	.15
大学の先生	46(48.4)	27(48.2)	.00
事務の人	56(59.0)	14(25.0)	16.33 ***
その他	5(5.3)	10(17.9)	6.25 *
誰にもたずねない	3(3.2)	0(0.0)	1.80

あてはまるもの1つを選択させた。()内は%

*p<.05 ***p<.001

表9. 空き時間にいる場所(複数回答可)

	都城(N=95)	宮崎(N=56)	$\chi^2(1)$
	選択人数	選択人数	
食堂や生協	54(56.8)	17(30.4)	9.92 **
自宅	35(36.8)	10(17.9)	6.07 *
図書館	31(32.6)	13(23.2)	1.52
休憩室	23(24.2)	5(8.9)	5.45 *
使っていない教室	19(20.0)	32(57.1)	21.73 ***
学内のベンチ	14(14.7)	38(67.9)	44.03 ***
近くの店	13(13.7)	4(7.1)	1.51
研究室	0(0.0)	2(3.6)	3.44
その他	17(17.9)	6(10.7)	1.41

あてはまるもの1つを選択させた。()内は%

*p<.05 ***p<.001

休憩を本来の用途とする休憩室や食堂の利用は、都城キャンパスの方がむしろ多いというのが特徴的な結果といえる。

4. 考 察

本研究は、新キャンパス開設時において、過去の大学移転研究の結果同様、大学生の精神健康度に悪影響が生じていないかどうかを検討し、もし、悪影響が生じているとしたならば、それは新キャンパスにおけるどのような環境要因の影響かを特定することを目的とした。まず、都城の新キャンパスにおいては、先行研究と比べてやや精神健康度が悪く、また有意差があるというほどではないが、宮崎キャンパスよりも精神健康度が良くないという結果が観察された。ただし、両キャンパス間には男女比や出身地などの基本条件に違いがあるため、そのようなキャンパス環境以外の要因が原因で精神健康度に差が生じた可能性をまず検討した。結果としては、出身地では精神健康度に有意差はみられず、また、キャンパス要因と性別との間には交互作用がみられたため、単純に県外出身者が多いとか男子大学生が多いということが理由で都城キャンパスの精神健康度が悪いという可能性は一応否定され、両キャンパスの間の差は何らかのキャンパス環境の違いによる可能性は保持されたものと考えられる。問題は、もしキャンパス環境の違いが原因であるならば、具体的にはどのような環境の違いによるものか、特に新キャンパス開設という要因であるといえるのかどうかであろう。

大学適応度に関しては、「大学満足感」「大学生生活適合感」「友人からのサポート」の三つのカテゴリーに分類され、「大学満足感」と「友人からのサポート」の二つのカテゴリーにおいては、明確に宮崎キャンパスの方が都城キャンパスに比べて適応度が良いという結果が得られた。

大学適応度の精神的健康度への影響を重回帰分析で検討したところ、両キャンパス共通に「大学生生活適合感」からの影響がみられ、都城キャンパスでのみ観察される独自の変数関係は存在せず、宮崎キャンパスでのみ「大学満足感」による影響が観測された。この結果は、少なくとも適応度の精神健康度への影響に限って言えば、都城キャンパスの独自性（特に新キャンパスであることによ

る独自性）が、精神健康度に及ぼす影響を検出できなかったということを意味する。重相関係数の値もそれほど大きくはないことから、今回検討しなかった未知の要因が精神健康度の悪さに影響を与えているものと思われる。その一方で、宮崎キャンパスでは、大学満足感という独自の要因が精神健康度にプラスの影響を与えていることが検出できたと解釈できよう。これは宮崎キャンパスの学生は、山田（2006）が説くように、管理栄養士の資格取得という明確な目標をもっており、宮崎キャンパスの健康栄養学部の提供するカリキュラムが彼らの目標に合っていると確信できれば精神健康度にもプラスの影響があるということではないかと思われる。

精神健康度に対する影響こそみられなかったが、友人関係のあり方はこれ自体が重要な情報であるといえる。友人関係は両キャンパス間で差があり、都城キャンパスはやや希薄であると考えられる。確かに休憩時間に一緒にいる人・わからない時にたずねる人の一位は都城キャンパスでも友人ではあるが、先に述べたように宮崎キャンパスと比べると都城キャンパスの学生は友人からのサポートは受けられていないと感じている。

都城キャンパスで、わからないことがある時に事務職員に尋ねるといった割合が高いのは、通常は友人関係でフォローされるような問題を、事務職員が肩代わりしているということかもしれない。実際、都城キャンパスの事務職員はよく学生の面倒を見ているといえる。以下は、春日の日常観察によるものであるが、彼らは履修登録や学費の納め方等の事務手続きについて、一人一人の学生に時間をかけて対応するのはもちろんのこと、時には起床時間や生活費の使い方などの学生生活を送る上でのアドバイスをを行ったり、学業・アルバイト・サークル活動などの様子について積極的に情報収集を行なうなどしている。そしてその活動範囲は事務室内にとどまらず、学内で積極的に声をかけたり、食堂では一人で食べている子をみかけたら一緒に食事をするようにしたりと、非常にきめ細かい。彼らの活動は、常駐する教員の人数不足を補ってあまりあるものといえ、このような地道な努力の積み重ねによって都城キャンパスでおこる問題が限定的なものにとどまっているのかもしれない。とはいえ、今後、在籍する学生が増えたり、あるいは学生支援以外の業務が増加した

場合にも、同水準の学生サービスを維持できるかどうかはやや不透明であり、常駐教員による学生支援体制の充実が併せて求められているといえる。

居場所に関しては、「大学ではくつろげない」という項目で唯一宮崎キャンパスが都城キャンパスに有意に劣っていたことからわかるように、空間的には古い宮崎キャンパスの方がむしろやや居心地の悪い環境であるのかもしれない。宮崎キャンパスには4年生まですべての学年が在籍することにより、食堂などは恒常的に混雑しており、また、空間的理由のみならず、時間割の余裕のなさもあって、本来の休憩室や食堂などではなく、次の授業の教室などを居場所とせざるを得ないものと考えられる。しかしながら、注目すべきは、このような空間的な意味での居場所の不自由さにもかかわらず、精神的健康度や大学適応度への影響は限定的なものにとどまるというところにあるだろう。逆に、都城キャンパスでは、確かにキャンパスが整備途上であるという問題はあるものの、1年生しかない分、空間的余裕という意味では宮崎キャンパスよりもむしろ恵まれているといえる。それにも関わらず、精神的健康度や大学適応度は宮崎キャンパスより悪い。このことから居場所という概念についてのより詳細な検討が必要ということになる。

一つの考え方としては、今回の事例では、空間的余裕という意味での居場所はイリリバントであったか、あるいは、ほかの要因と比較して相対的な寄与率が低かったために、その影響が検出できなかったという解釈がありえる。また、別の考え方としては、穿った見方かもしれないが、空間的余裕があることはむしろ否定的に働いている可能性がある。すなわち、人口がある程度密集している方がコミュニケーションをとりやすいなどの理由で人間関係の構築にとって好ましい場合もあるという解釈である。言い換えれば、居場所という概念は第一義的には人間関係を表す概念で、空間的余裕がありさえすれば自動的に居場所として機能するのではなく、居場所として機能するためには早期の人間関係の確立など、前提条件を満足することが必要ということなのかもしれない。

以上のように、研究上の残されている課題としては、都城キャンパスの精神的健康度の悪さと友人関係の希薄さを規定する要因を特定し、それが新キャンパスの開設という環境条件と関連している

かどうかをより詳細に確認することが求められている。そして、支援上の目的とも関連するが、居場所が居場所として機能していくためには具体的にはどのような前提条件が必要かを検討し、大学として環境改善につなげていくことが求められているといえる。

摘 要

本研究の目的は、新しく開設されたキャンパスにおいて、大学新入生の精神健康度や大学への適応度を調査し、新キャンパス開設という環境要因によって影響を受けていないかどうか、受けているとしたならば、具体的にはどのような要因によるものかを特定することである。新キャンパス95名と、比較のため既設のキャンパス56名に質問紙調査を実施した。結果は以下の通りである。

- (1) 新キャンパスの精神健康度は既設のキャンパスと比べて、わずかながら悪かった。
- (2) 新キャンパスの大学適応度は既設のキャンパスと比べて、大学満足感、友人からのサポートという側面において有意に劣っていた。
- (3) 大学適応度は精神健康度に対し、新キャンパスにおいては大学生生活適合感という因子で、既設のキャンパスにおいては大学生生活適応感に加えて大学満足感という因子で有意な影響がみられた。

新キャンパスには空間的な余裕があるにも関わらず、友人関係は希薄であったため、学生環境の改善のため、望ましい居場所の在り方についてのより詳細な検討の必要性が論じられた。

謝 辞

本論文の作成においてご協力いただいた、山梨英和大学の田中健夫先生に深謝いたします。

引用文献

- 1) 浅岡章一 (2002) 交友活動への積極的関与が入学直後の大学生の精神的健康に果たす役割について、日本教育心理学会第44回総会発表論文集 p.114.
- 2) 稲村博, 加納克己, 田上不二夫 (1979) 筑波研究学園都市における精神衛生問題第3報一実

- 態調査報告 (2), 筑波の環境研究 4: 86-97.
- 3) 鹿島なつめ, 田中健夫 (2006) 学生期ごとの生活空間および居場所の変化と大学適応度との関連, 学生相談 (九州大学学生生活・修学相談室紀要) 8: 25-35.
 - 4) 木下清, 島田修, 保野孝弘, 綱島啓司 (1997) 大学生の精神健康調査, 川崎医療福祉学会誌 7 (1): 91-101.
 - 5) 文部科学省 (2000) 大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを目指して -, 大学における学生生活の充実に関する調査研究会報告.
 - 6) 中川政俊, 荒木乳根子, 平啓子 (2006) UPI (大学精神健康調査) とその後の心理的問題の発生および学業遂行との関連に関する研究 田園調布学園大学紀要 1: 51-67.
 - 7) 中井大介, 茅野理恵, 佐野司 (2007) UPI から見た大学生のメンタルヘルスの実態 筑波学院大学紀要 2: 159-173.
 - 8) 中丸澄子 (2004) 特別講演 キャンパス移転が学生生活に及ぼす影響 ~ 広島大学の経験から ~, 学生相談 (九州大学学生生活・修学相談室紀要) 6: 6-20.
 - 9) 大久保智生 (2005a) 青年の学校適応への関係論的アプローチ (博士論文要旨), 人間科学研究 18: 119-120.
 - 10) 大久保智生 (2005b) 青年の学校への適応感とその規定要因 教育心理学研究 53 (3): 307-319.
 - 11) Rooijen, L.V., (1986) Advanced student's adaptation to college. *Higher. Education* 15: 197-209.
 - 12) 田中健夫, 吉良安之, 福留留美, 春日由美, 鹿島なつめ (2004) 新キャンパスへの移行と学生生活 (その1) - 広島大学における一連の研究との比較により -, 学生相談 (九州大学学生生活・修学相談室紀要) 6: 56-65.
 - 13) 田中健夫, 吉良安之, 福留留美 (2006) 新キャンパスへの移行と学生生活 (その3), 学生相談 (九州大学学生生活・修学相談室紀要) 8: 36-47.
 - 14) 都筑学 (1998) 青年心理学から見た「居場所」の問題, 日本青年心理学会大会発表論文集 6: 30-31.
 - 15) 脇田貴文, 小塩真司, 願興寺礼子, 桐山雅子 (2007) *University Personality Inventory* 短縮版の開発, 人文学研究論集 (中部大学) 17: 123-128.
 - 16) 渡辺登 (1992) 質問紙法による大学生の精神健康調査, 社会精神医学 15 (4): 269-275.
 - 17) 山田ゆかり (2006) 大学新入生における適応感の検討, 名古屋文理大学紀要 6: 29-36.